



TITLE:

共同利用研究所としての物性研究所の現状と将来(<特集>現在我国の物性物理学の研究体制について-そのII共同利用研究所の問題を中心に-)

AUTHOR(S):

徳永, 正晴

CITATION:

徳永, 正晴. 共同利用研究所としての物性研究所の現状と将来(<特集>現在我国の物性物理学の研究体制について-そのII共同利用研究所の問題を中心に-). 物性研究 1969, 13(3): 226-227

ISSUE DATE:

1969-12-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87234>

RIGHT:

共同利用研究所としての物性研究所の現状と将来

北大・応電研 徳 永 正 晴

学内情勢のこともあり、期日もなかったので集っていたゞけた4人の北大の大学院の人達との意見交換の後書いたことをことわるのみにする。私と特に違った意見は無かったので、私の思考法に従って記す。

1. 現在への批判

初期のように物性研にかなりいい装置が揃い、その他の大学が貧弱であった頃に比して、なんとか自分のところで研究が可能になった主要大学では、研究会の旅費が出るところとして以外物性研を見ていないのではなかろうか？サービス施設利用以外の共同利用については、物性研以外の研究室との共同研究又は装置の借用の交渉と何ら変るところはないが現状で、この交渉がつけば物性研に認められた旅費等が使えるという実質と感じている人が多かろう。従ってレッテルをはるならば、人事権は東大以外の旧帝国大学有力ボスにも半分位公開された東京大学第二物理学部で、共同利用に使われるという“たてまえ”により、予算等に優先権を与えられることで、日本では恵まれた研究条件をもち、しかも所外との共同研究が予算的に保証されているうらやましいエリート研究所という具合であろう。最もよい比較は京都大学原子炉と物性研の中性子回折の共同利用をみればよい。もっともたてまえと実質が異なるのは現在の大学全般であると学生はいっているが。

2. 現在の形での共同利用としての物性研は必要か？

東京大学の一付置研究所としての存在価値はあるだろうし、日本の物性研究のなかでのかなりの中心的メンバーが集った能率のよい研究場所である。しかし今のまゝならば共同利用の看板ははずした方が中味とたてまえが一致して内外とも居心地がいいのではあるまいか？共同利用や研究会の旅費は物性論グループが出せるようにして、流動研究員や研究会の費用として、どこからどこへでもいけるようにするのが有効であろう。客員部門とか任期制とか、所員会議の改組（助手の参加）とかまして大学院博士の審査権を物性研におくとかは

要するにふつりの大学付置研究所が要求され要求する当然のことであり、共同利用研究所としての特殊性ではない。現在共同利用として必要なことといえは一大学では予算的に不可能な大型装置（原子炉等）を共同便所的に使える場所の設置だけではないか。そこを私物化させず、しかもこま切れた仕事でない腰の入った研究の出来る場所にする以外にないように感じる。

3. どうしたらいいのか？

予算と人事と労働力を握ってとにかく論文を多く生産した人が評価され、共同利用の装置の維持管理に頭を悩ます人が下積みの苦勞をし、この体制が一向に変わることなく差別がますます固定化され、エスカレーターにのりおけると疎外されていく現在の研究者の世界では必ずしも物性研の研究者だけが責められる筋合いは無いであろう。これらのことを抜きにしていくら制度をいじってみても本質は変わらないであろうが、ルールとしてたてまえと中味だけは一致させてほしいものである。物性研の中で実質共同利用的なものと、実質個人研究室の寄せ集めの付置研究所の部分に制度的にも分けてしまい、共同的なものは完全に共同利用のたてまえ通りにして、東大付置物性研の研究者も共同利用物性研に対しては他の場所の研究者と平等に扱われるという具合である。最後にエリート研究者を国立研究所として例えば筑波山のふもとに集め他との差別を深めることで業績競争を激化させ、Ideology 的にもふりわけようという資本主義としては当然の能率化の動きとの関係の観点も見落してはならないという指摘があったこともつけ加えたい。

「大学改革と物性研究所」について

物性研 芳 田 奎

物性研所長鈴木平氏の「大学改革と物性研」と題する文章を検討し、意見を述べるように編集委員の方から依頼されて筆をとるわけであるが、この小論に述べられた共同利用研構想には、私も大すじにおいて殆んど同意見である。従